

3 小中9年間を見通したキャリア教育

1. キャリア教育でつきたい力

国が示すキャリア教育で育む力（4つの「基礎的・汎用的能力」）をふまえ、大阪府では、5つの「つきたい力」を示しています。

「基礎的・汎用的能力」

人間関係形成・社会形成能力

（例）他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等

課題対応能力

（例）情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追求、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等

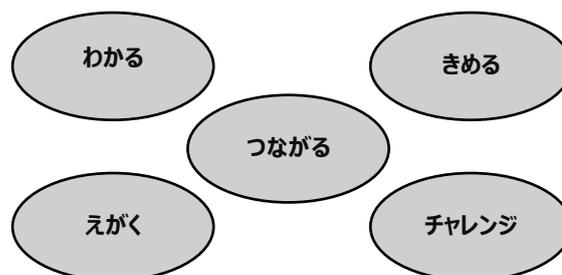
自己理解・自己管理能力

（例）自己の役割の理解、前向きに考える力、忍耐力、自己の動機付け、ストレスマネジメント、主体的行動等

キャリアプランニング能力

（例）学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等

大阪府の5つの「つきたい力」



2. キャリア教育として「つきたい力」の系統性

5つの「つきたい力」の系統性の例を、学年ごとに整理しました。あくまでも、ここに示しているものは、例であり、各学校・各中学校区において、日々接している子どもたちの実情に応じて、設定することが大切です。

	小 学 校		中 学 校	
	就学前～低学年	中学年	高学年・中学1年生	中学2～3年生
つながる	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。	自分のよさを見つける。
	友だちとたくさん話をする。	友だちの話を聞き、自分の気持ちを伝える。	相手の考えや気持ちを理解し、自分のそれを、分かりやすく伝える。	相手の意見を尊重し、自分の考えや気持ちを工夫しながら伝える。
わかる	分からないことは、先生や友だちに質問する。	分からないことや調べたいことがあるとき、先生や友だちに質問したり、自分で調べたりする。	分からないことや知りたいことがあるとき、誰かに質問したり、自分で資料や情報を集めたりして、自分が納得する答えを見つける。	分からないことや知りたいことがあるとき、誰かに質問したり、自分で資料等の情報収集を行ったりして、周りも納得できる答えを見つける。
	自分の気持ちを知る。	自分の考えを持つ。	いくつかの情報を総合的に判断して、自分の考えを持つ。	多様な進路の中から、自分に適した進路を選択する。
えがく	好きなことや、やりたいことを見つける。	やってみたいことや目標を見つける。	目標を立て、実現するための方法を考え、計画する。	自分の将来の夢や目標を立て、実現するための方法を考え、計画する。
	やりたいことに取り組む。	好きでないことにも取り組む。	好きでないことや苦手なことにも、進んで取り組む。	失敗してもあきらめず、困難なことにも挑戦する。

3. カリキュラム・マネジメントとキャリア教育全体指導計画「Plan」

“うちの子たち”に「つきたい力」を明確にする

キャリア教育の全体指導計画を作成するにあたり、前頁に記したつきたい力などを参考に、今在籍している子どもたち、すなわち“うちの子たち”にとっての課題は何かを丁寧に分析し、その解決に向けて必要な資質・能力を明確にすることが不可欠です。

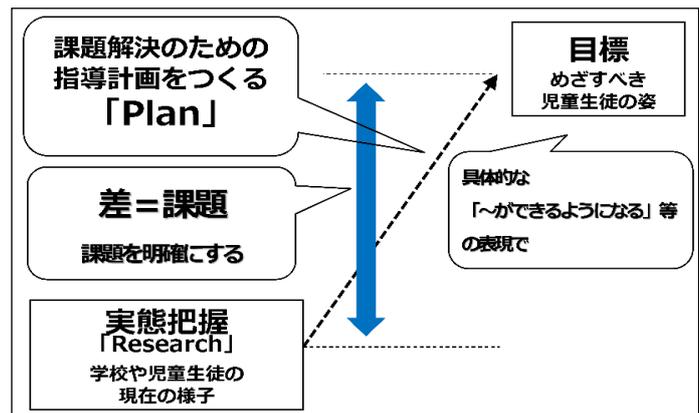
実態把握「Research」

「つきたい力」を明確にし、PDCAサイクルを機能させ、具体的な取組みを計画するためには、まず実態をつかむ「Research」が大切です。新しくアンケートの実施を検討する前に、これまで実施しているアンケートや調査等を活用できないか確認し、その回答

状況から、実情を把握しましょう。その際、キャリア教育として何か特別に項目を追加して設定する必要があるか慎重に検討しましょう。学力向上や生徒指導、人権教育等、それぞれの学校において大切にされてきた指標などから横断的に分析を行うことが大切です。また、定量的な評価だけでなくキャリア・パスポートの記述等、定性的な評価も見取りながら丁寧に現在の学校の課題を洗い出しましょう。

実態把握による児童生徒の現状をスタートラインとし、卒業時点で、「地域や社会の課題を解決するため、主体的に行動することができる」等、「できるようになってほしい」行動等を具体的に示し、目標「めざすべき児童生徒の姿」として設定します。

そして各学年で、どの力をどの程度まで育むのかを設定し、全教職員で意識することが大切です。



キャリア教育全体指導計画の作成

全体指導計画とは、「めざす子ども像」と「つきたい力」の実現に向けて、児童生徒の発達段階ごとに、どのような目標でどのような取組みを行うのかをまとめた計画です。その作成にあたっては、「PDCA サイクル」を機能させることに留意する必要があります。

キャリア教育を効果的に進めるためには、地域（中学校区等）の教職員が連携して、全体指導計画を作ることが大切です。

学年ごとの詳細な計画を立てる際には、適切な実施時期の検討や必要に応じて教科の単元配列を組み替えるなど教科横断的な観点を取り入れることも大切です。また、カリキュラム・マネジメントの観点で整理されたカリキュラム表などを活用すると、教科等との関連が可視化され、つきたい力をより意識づけることができます。

全体指導計画では、学年のつながりやつきたい力の系統性等を意識することや、地域資源等を活用しながら効果的に組み合わせることも必要です。

参考：小中学校課作成「カリキュラム・マネジメントの手引き」

<https://www.pref.osaka.lg.jp/o180080/shochugakko/r0102karimane/index.html>



キャリア教育推進組織・体制づくり

キャリア教育を効果的に進めるために、各校でキャリア教育の担当者を決め、体制や役割を明確にすることが重要です。キャリア教育担当者は、それぞれの校務分掌における取組みがキャリア教育全体計画に照らして学校全体でつながっているか俯瞰的に見つめることが大切です。

中学校区内の各校のキャリア教育担当者が集まってキャリア教育を推進する体制ができると、地域が一体となってキャリア教育を進めることができます。

4. キャリア教育の実践「Do」

目標と現状の差から「すべきこと」を見出し、取り組みます。P6に示した、キャリア教育でつきたい力「基礎的・汎用的能力」を見ると、学校における様々な学習活動において育まれる力とリンクしていることが分かります。普段の学習活動からキャリア教育でつきたい力を意識しながら取組みを進めることが重要です。また、中心となる一つの取組みだけでなく、様々な教科や学習活動を関連させて「つきたい力」を育みます。その際、様々な学習活動に優先順位をつけ、指導者が単元を焦点化し、意図的にキャリア教育とつなぐような、体系的、系統的な指導とすることが大切です。

5. キャリア教育の実践の効果検証「Check」

効果検証、何でいつ行う??

効果検証の時期や方法は、例えば、取組みの都度に行われる振り返りを活用し、実施した取組みが有効なものとなっているか確認したり、学期ごとにキャリア・パスポートを活用したりすることが考えられます。また、実態把握の際に活用した指標等を活用し、年間を通した効果検証を行うことも考えられます。

効果検証の際は、キャリア教育担当者だけでなく、様々な校務分掌の代表者等を交えて行うことで横断的に検証を行うことができます。

大阪府版キャリア・パスポート

キャリア・パスポートは各学校や学級において、創意工夫を生かした形での活用が可能です。その参考となるよう府教育庁は大阪府版キャリア・パスポートを作成しています。大阪府版キャリア・パスポートのふりかえり項目では、「つきたい力」がついたかどうかを自己評価し、自分の成長を可視化できるようになっています。取組み後の「ふりかえりカード」では、取組みが「つきたい力」につながっているのか、児童生徒にどのような変容が見られたのかを見取り、取組みの評価、見直しにつなげることができます。

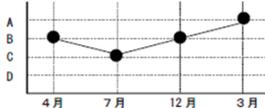
【大阪府版キャリア・パスポート】より

「ふりかえり項目」

◎1年間のわたしのうつりかわりを見てみましょう。

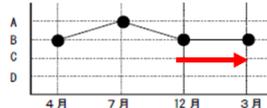
ふりかえり		4月	7月	12月	3月
		あてはまるところに、○をつけましょう。			
①自分のよさを見つけれ ましたか。	そう思う				○
	少しそう思う		○	○	
	あまりそう思わない	○			
	そう思わない				
②友だちの話を聞き、自分の気持ち をつたえましたか。	そう思う		○		
	少しそう思う	○			○
	あまりそう思わない			○	
	そう思わない				

⑤自分の将来の夢や目標を立て、実現するための方法を
考え、計画しましたか。



※A「そう思う」 B「少しそう思う」 C「あまりそう思わない」 D「そう思わない」

⑥失敗してもあきらめず、困難なことにも挑戦
しましたか。



「ふりかえりカード」

「0000」ふりかえりカード（4年生）

うれしかったこと、楽しかったこと、気づいたことなどを
書きましょう。

年 組
名前

記入日 年 月 日

(先生から)

※大阪府版キャリア・パスポートはあくまで一例です。中学校区や学校の現状等に合わせてカスタマイズして活用してください。

<https://www.pref.osaka.lg.jp/jidoseitoshien/kyaria/index.html>



取組みの評価・目標の達成度の見取り「Check」

各学年で実施したキャリア教育の取組みについて、キャリア・パスポートの記載内容等から、子どもの変容を把握し、子どもの発達段階に応じた取組みになっていたかを検証しましょう。また、次の学年への接続を意識した取組みになっていたかなど、学校全体で取組みの評価や目標の達成度を見取った上で、次に予定している取組みの改善を図りましょう。

「目標」を達成できたか、「つきたい力」が身についたかどうかなど、取組みの評価や子どもの変容を見取るためには、「アンケート」等の実施が有効です。

アンケートの実施により、できる評価は、「アウトプット評価」と「アウトカム評価」の2つがあります。

アウトプット評価

「何をどれほどやったか」という評価

→全体指導計画に基づき、「取組み」をやったかどうかを評価するもの。

アウトカム評価

「どのような成果を挙げたか」という評価

→「つきたい力」が身についたかどうかを評価するもの。

「目標」は、取組みの評価や子どもの変容を見取る「アウトカム評価」ができるものとして具体的に設定する必要があります。

6. キャリア教育全体指導計画の検証と見直し「Action」

中学校区でキャリア教育の共有の場をつくる

キャリア教育に特化して会議の場を持つことができればよいですが、そのような時間をとることが難しいのが実情です。しかし、学力向上や生徒指導、人権教育などをテーマに、中学校区の教職員が集まり、小中連携の観点で協議する機会というのはどこの学校でも持たれているのではないのでしょうか。

その際、子どもたちが書いたキャリア・パスポートや実態把握の際に活用した各種指標の結果等を交流し、中学校区のめざす子ども像や設定した目標に対してどの程度達成されてい

るのかを話し合うことで、キャリア教育の観点からも様々な取組みについての成果や課題が見えてくると考えます。ぜひ、取組みを通して見られた子どもの変容等を話し合い、各校における取組みの成果や課題を全体で共有し、キャリア教育全体指導計画をはじめ、各種計画を見直してみてください。

取組みの見直し・改善

各学校の検証をもとに、中学校区のキャリア教育全体指導計画で示した「つきたい力」や「ねらい」、年間の取組みについて見直し、改善につなげることが大切です。

「つきたい力」を見直す際には、キャリア教育として「つきたい力」の系統性（P6を参考）などを活用して、中学校区の実情や発達段階に応じて設定しましょう。

見直した全体指導計画は、必ず学校の年間計画に反映し、すべての教職員で共有しましょう。

7. キャリア・パスポートの引継ぎ

キャリア・パスポートの引継ぎについては、「学年間の引き継ぎは、原則、教師間で行う」「校種間の引き継ぎは、原則、児童生徒を通じて行う」こととなっています。

引継ぎにおけるキャリア・パスポートの効果的な活用として、年度末の学年間の引継ぎで記載内容を教職員間で共有し、子ども理解に役立っているという事例や、校種間のキャリア教育担当者間で新中学1年生の引継ぎ会議を実施し、キャリア・パスポートを活用して情報共有しているという事例があります。また、高校等進学先で、中学校時のキャリア・パスポートを見ながら、中学校生活を振り返り、高校のキャリア・パスポートにまとめ直すという事例もあります。児童生徒の学びを深めるため、キャリア・パスポートを有効活用しましょう。

【中学校卒業後の取り扱いについて】

中学校卒業後の活用に向けて、一人ひとりの中学校卒業時までの活動が記録・蓄積されたキャリア・パスポートは、高校等進学先から指示があるまで大切に保管するよう生徒に伝えて返すなど、確実な引継ぎができる工夫をすることが大切です。

※参考資料：国立教育政策研究所「キャリア教育リーフレットシリーズ特別編」【キャリア・パスポート特別編1～10号】

https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div09_shido.html

※参考資料：文部科学省初等中等教育局児童生徒課「キャリア・パスポート」に関するQ&Aについて（令和4年3月改訂）

https://www.mext.go.jp/content/20220314-mxt_jidou01-000007080_1.pdf



8. キャリア教育は、学校の教育活動を俯瞰的に見つめなおす鍵

キャリア教育は学校で行われるすべての教育活動を通して行っていくものです。

各学校では、教科研究部や生活指導部（生徒指導部）、人権教育部など校務分掌の組織が設けられ、各部会ではそれぞれの分掌の役割に沿って、各校における課題解決に向けた話し合いや情報共有が行われています。

キャリア教育の観点で、各学校における様々な取組みが点で終わらず面として機能しているか俯瞰的に見つめなおしてみることで、子どもたちのよりよい成長につながるのではないのでしょうか。